
盗賊は世界を救います

緑之舎院

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗賊は世界を救います

【Nコード】

N0745BA

【作者名】

緑之舎院

【あらすじ】

勇者に頼れず、悪におびえる人々。手を差し伸べたのは一人の盗賊だった。

勇者を正し、悪を討つ。

秘宝、利益は後回し。

そんな変わり者の盗賊が世界を旅する単純なお話。

OP

この世界はゲームという名の大きな宇宙のもとに成り立っている。ゲームにはいくつかの惑星がある。冒険の得意な者の多いRPG（正式名称：ロールプレイング）、身体能力に秀でた者の住むACアクションT、人々が競技で点数を競うSPT（SPT）…etc

互いの星は距離が近いこともあってか、他星からの移民を受け入れているがどの星で誰が成功するかなど誰にも全く分からない。

どの星でも名誉を手にするものもいれば、生まれた星で着実に成果を挙げ花を咲かす者もいる。一方で、全く誰にも知られずに一族が途絶えることも多々ある。

この世はどれだけ自分の名前を人々に知ってもらうかが全てなのだ、どれだけ素晴らしい能力ステータスを持っていたとしても誰も知らなければそれまで…なのである。

今回の物語の舞台はRPGとなっており、それでは“スイッチオン”

「…」

目を覚ますと、俺は見知らぬ草原に倒れていた。

体を起こし辺りを見渡す、見覚えがあるような気もする。と言っても目印になるようなものが無いため、どこまで見てもただ緑の絨毯が広がっているだけだ。

「ここはどこだ…、俺の名前は…」

“神斬 聖”かみきり 親譲りの緑の瞳に黒髪。…うん、その辺りは思い出せる。

思い出せないのは、俺が何でこんなところにいるかだな…

体力が空になつた記憶は無い、ダンジョンに入つてやられた記憶も無い。ただ俺は宿で眠つただけのはずだ。そういえば、いつも下げてゐる小さなバッグが無い。ベルトにつけるタイプだから寝るときはいつも外してる、それにマントとバンダナも寝るときに外したままだ…やっぱり俺は宿で寝てたつてことなのか…？

「聖…」

聞きなれた声がした。旅立ってまもなく出会つた、一人目の仲間だ。

「聖…、もうどこまで行つたんだろう」

空からの声、上を見ると真姫が空を移動しながら叫んでいた。

「真姫さ…ん、蘭城真姫さ…ん」

適当に聞こえるくらいの声で呼んでみた。こちらを向くことなく飛んでいく真姫。

「もしも…し」

「…」

「真姫、おい聞いてんのかコラ」

怒鳴ってしまった…むしろ叫んだに近いくらいの音量で。

「おつ、聖発見！」

真姫はゆっくり地面に降りてきた。そして、こちらに駆け寄ってくる。

「探したよ聖、こんな所にいたんだね」

どうやら俺は、真姫たちとはぐれてしまっていたらしい。寝ていたはずのに…

「ここに何か思い入れとかあるの？」

「何だよ？」

真姫が唐突に聞いてきた。多分昨日たどり着いた村の近くの草原だろうと思う。けど、この辺は昔一度来た位で思い入れなんてものある訳が無い。

「何でつて…、今朝の出来事忘れたの？」

「今朝？」

そういえばドでかい爆発音を聞いたような気が、そしたら何故か空中に投げ出されて…

「…何かの爆発に巻き込まれた気がする」

「それは…」

なんだか思い出してきた…。まだ村まで歩いた疲れの取れていない俺は、珍しく日が昇るまで眠っていた。そしたら…そうだあの“職人様”が！

「聖さん！」

そうだ、ティミラにやられたんだ。

「見つかってよかったです、ご迷惑をおかけしました」

ティミラは頭を下げ、謝罪の態度。

「今日は何をしてたんだ？」

先に謝られたため攻める事も出来なかったので、俺はこの原因を聞いてみた。

「今日は転移薬の調合をしていたんです、それで成功したんですけど…」

「けど？」

「本人がどこに行きたいかちゃんと頭の中で思っていないと、上手く転移できないらしくて」

「それで俺はこんな所に飛ばされた訳か…」

大体分かった。全面的にこいつが悪い、なので鉄拳制裁しようとしたが

「ほらほら、朝ごはんまだなんだから戻ろ」

知ってか知らずかの真姫の行動によってティミラは俺からダメーシをもらうことなく、宿に戻る事となった。

宿までそれほどの距離だったわけではないが寝起き、且つ朝食前ということもあって歩は当然遅くなり、それなりに時間がかかってしまった。

その間に今朝の事を聞き整理した、どうやらうちの専属職人のティミラさんは朝から熱心なことにお仕事 - もとい実験 - を行っているらしい。

その成果が俺の転移なのだ。ひょっとすると宿自体にも被害が出たかと思つたがそこは天才職人様、爆発そのものには破壊力が無いように設計していたそうだ。何故それが出来て事故が回避できないんだ…

現在まで俺自身、ほとんどティミラの作品を使用していない。だが、やはり才能というものそれなりに感じる。

もともとRPGの住人ではなかったティミラを連れて来るのには、それなりに骨が折れた。でも、それだけの労働の価値は確実にあると思つた。

物を作る腕はもちろんのこと、雰囲気や態度も悪くない。戦闘力は無いが、それは求めていないので関係ない。

ただ一つ、作業中や戦闘中以外の“普通の時間”が安定感にかけ
る。

言つてもどうにもならないから言わないけど。

何て考えながら喋つてゐる間に村についていた。

ルート1-1

始まりの村 - サルフ

緑豊かな自然の中にある小さな村。

この何も無い小さな村が、始まりの村と呼ばれるのには理由があった。

それはここからある勇者の旅が始まったからである。

その勇者は、腐りきった一つの協会を正そうとした。しかし、それが叶うことは無かった。

“彼”が勇者でなければ、歴史は違っていたかもしれない…

村に着くと、俺たちはすぐに宿に戻った。

俺達の寝ていた部屋を見てみたが、本当に傷一つ無い。

周りの人間達は、俺たちを見てなにやらコソコソと話していたが無視。

「別に実害を出したわけじゃない、気にすんな」

何となく、ティミラにそう言っておいた。

店主の業務的挨拶を背後に受けつつ、食事の置いてある机を囲み、腰を下ろす。

パンとスープ、焼いた卵の朝食。蒸気と共にスープの匂いが空腹を刺激する。

これはこの村のものではなく、ティミラの料理だ。

こいつに出来ないことは今までの旅路でほとんど見たことが無い。初めてのことであればそれにやっってしまうし、何度かやれば自分のものになってしまう、職人たる所以なのかもしれない。

料理を食べ始めるとしばしの沈黙、しばらくして真姫が口を開く。「この村も平和そうに見えて、やはり“あれ”の影響があるみたい

ね」

あれとはこの窓からも見えている勇者協会のことだ。

「そりゃそうだろ、この世界の勇者の地位は確立されちまつてるわけだし」

RPGにおいて、勇者というのは象徴とでも言えば正しいのだろうか。

この星の人々が悪の力の前に滅ばなかったのは、とある勇者のお陰だ。しかし、それも今は昔か…

「規模が小さいとはいえ村の外にあの協会、しかも勇者が旅の仲間パーティーにいない一団が騒ぎを起こしたとなれば…当然村の人間としては関わりたくないだろうな」

「早くここを出た方が良いんじゃない？」

ティミラが周りを気にしながら言う。もう少しどっしりと構えれば今より職人らしくなんのに…

「まだ着いたばかりで目的が達成できてない、それにあんな落ちぶれた勇者どもが何人来ようが俺が倒してやるさ…復讐しようなんて気持ちも起こらないくらいにな」

俺たちが村々を回っているのにはもちろん理由がある。

一つとしては協会を正すこと。これが最終目標であり、最重要事項なのだが、現在の最優先事項ではない。

もう一つの理由が勇者を旅の仲間に加えること。

今までいろんな勇者に出会ってきたが、仲間のいない勇者は少なかった。いたとしても、そいつには一人が向いているだろうと思う奴ばかりだった。

結果として才能ある若者を探すことになった、それも旅に出たことのないような素人が望ましい。

そんな人間は当たり前のごとく簡単に見つからず、すでに訪れた町村は二桁になるうとしていた。

しかしこのメンバーは端から見る何なんだろう…

マントにバンダナの盗賊、変な服装の剣を持たない魔法剣士、で

かいカバンを引きずる眼鏡の少女…ただの下っ端以上の何者でもない気がする。

「じゃあそろそろ行きますか」

意味の無い試行を真姫の声が終了させた、そして『ここにおいても何も変わらないよ』と続ける。

「そうだな」

俺は一度部屋に戻りバンダナとマントを装着した。真姫はどっかで買った学生服（茶のブレザーにチェックのスカート）、ティミラは白衣、まあいつもの服装だ。

そして俺たちは村を歩き始めた。そこで、彼女と出会った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0745ba/>

盗賊は世界を救います

2012年1月10日23時45分発行